

活躍する県出身者たち

島根マインド

○83●

かつた・ともはる 江津市 年に定年退職した。日印協会出身。江津工高卒。1964年には1979年に入会し、2年、竹中工務店に入社。国際008年から現職。1級建築事業本部などを経て2005士の資格を持つ。

公益財団法人・日印協会(東京都中央区)の勝田友治理事(67)は、大手ゼネコン時代に築いたインドとのつながり生かし、両国の交流拡大をライフワークとする。折しも、今年は日印国交樹立60周年の節目。自らが働き掛け、12月に行われることになった石見神楽のインド公演の成功に向け、奔走する。

24日までの約1週間、訪印し、公演先のニューデリー、チェンナイで会場設備や受け入れ態勢、PR方法などを打ち合わせた。現地の日本大使館や商工会議所連合会などの支援も取り付け、「手応えをつかめた」と喜ぶ。インドとの結びつき

日印協会理事 勝田 友治さん(江津出身)



業務 日印の相互理解の促進に向けた情報収集や事業の実施など
 住所 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14スズコービル2階
 電話 03(5640)7604

古里との交流橋渡しを

店(本社・大阪市中央区)に勤務していた1976年にさかのぼる。500人が働く現場で3年間、指揮した。2005年に竹中工務

店(本社・大阪市中央区)に勤務していた1976年にさかのぼる。500人が働く現場で3年間、指揮した。2005年に竹中工務店(本社・大阪市中央区)に勤務していた1976年にさかのぼる。500人が働く現場で3年間、指揮した。2005年に竹中工務

ふるさとへの提言
 控えめな県民性が特長だが、打って出る積極性も重要な。地域の発展に海外交流は欠かせない。対インドでは、力になりたいと思っている。交流拡大に挑戦してほしい。

人を数えるインドの人口は今なお増え続け、IT産業などによる経

濟発展もめざましい。これに伴い、中流層が急速に拡大しており、「ビジネスチャンスは、どんどん広がっている。可能な限り、お手伝いしたい」と語る。日本国内にも、首都圏だけで約1万人のインド人が暮らし「さまざまなニーズがある。自らの人脈や協会のネットワークを活用し、情報提供や経営者同士の引き合わせなどに取り組んでいる。もちろん、ふるさととの「縁結び」も念頭にある。「島根とインドの経済交流のきっかけもつくりたい」。石見神楽の公演の先にある、より大きな夢の実現を見据えている。